様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６５７
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２００２７

研究課題名（和文）メルロ＝ポンティ存在論と芸術の位置に関する研究

研究課題名（英文）Study for the position of the Art in the ontology of Merleau-Ponty

研究代表者
本郷　均（HITOSHI, HONGO）

東京電機大学・工学部・教授

研究者番号：００２２９２４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　フランスの現象学者メルロ＝ポンティの遺稿草稿の調査を行うことによって、彼の最晩年の重要な芸術論『眼と精神』に記されている存在論的な問題を周辺的な面からも明らかにした。
　その際、メルロ＝ポンティが考察の対象としていた画家セザンヌの他に、スイスの画家パウル・クレーからも大きな影響を受けていることを、クレーのテクストの検討を通じて明確にすることができた。この考察を通じて、「音楽」と存在論との関係という問題が重要な意味を持つことがわかった。

研究成果の概要（英文）：This research deals with french phenomenologist Merleau-Ponty's posthumous manuscripts of the important text:"Eye and mind". It makes clear the ontological problems of Merleau-Ponty and the reason why he had argued on the Art. And the investigation on the texts of Paul Klee makes evident that Merleau-Ponty is influenced by Klee's thought on the mission of the artist. At last his reserach come to the front of the new problem, that is what is the relation between the music and ontologie.

研究分野：哲学

キーワード：メルロ＝ポンティ　セザンヌ　パウル・クレー　芸術　音楽　存在論　中間領域　見えないもの

１．研究開始当初の背景

本研究は、この前年度まで受けていた科学研究補助費（課題番号 21520029「メルロ＝ポンティの存在論構想における「芸術」の寄与」）の成果を受けて、これをさらに進めることを課題としていた。この研究では、専らメルロ＝ポンティの芸術論であると同時に存在論の素描でもある『眼と精神』の成立過程に関して、草稿研究に基づいて考察を行っていたが、これを受けて、その他の同時期の草稿調査と影響関係を調べることでメルロ＝ポンティ存在論の動機の解明が深められるだろうという予想が本研究開始時の背景であった。

２．研究の目的

前研究の成果に基づきそれをさらに進める形で、以下の３点の仮説の検討を行う。この検討によって、晩年のメルロ＝ポンティが前期における「知覚」の哲学から存在論へと展開ないし転回するにあたって、なぜ芸術を手掛かりとしたのかを明らかにすること、そしてこれを通じて、存在論の依って立つ根源を追求すること、これが本研究の目的である。

（１）後期メルロ＝ポンティの存在論が、芸術と同じ根源を有していること。このことは、単に芸術「について」語り考察するというような、外的に芸術と哲学を関わらせようとするのではなく、芸術と哲学とが同じ根源から出現することを理解することによってのみ、哲学が芸術について語る言葉にも意味を与えることができる、ということを明らかにすることになる。

（２）それにもかかわらず、表現としては両者は根本的に性格を異にするが、その理由が、おそらくはメルロ＝ポンティの哲学が備えている超反省のメカニズムに基づいていること。つまり、芸術と哲学が同じ根源から湧出してくるとしても、哲学が「言葉」によって構成される創造作用だという点で、その根源に対してはいわば自乗化された関係を有することになる。そこに「超反省」とメルロ＝ポンティが呼ぶ機制が働くことになると考えられる。この点の問題である。

（３）しかし、超反省自体がまた同じ根源に依拠しており、それが「肉」と呼ばれる謎のような概念に基づいていること。この「肉」という概念が、後期メルロ＝ポンティの哲学、特にその存在論の要をなしていることは周知のことである。しかし、メルロ＝ポンティの夭逝のため、それがどのような射程を持つものであるのかについて、またそれがどのような性格をもつものであるのか、この点については、必ずしも明確ではない。そこで、最終的には、芸術、哲学、超反省という三つの側面からこれを押さえることで、判明とは言えないメルロ＝ポンティ存在論の全幅が押さえられるのではないかと考えられる。この点を解明する。

３．研究の方法

上の目的を果たすには、具体的にはメルロ＝ポンティの晩年の哲学の形成過程をも含めて、『眼と精神』のみならず、コレージュ・ド・フランスに於ける「自然」講義や『見えるものと見えないもの』に関しても、幅広く考察することが必要となった。そのため、基本的には以下の２点の作業を要することになる。

（１）「自然」講義や『見えるものと見えないもの』関連草稿（公刊されていないものも多い）などの精査。この遺稿は、現在まだメルロ＝ポンティの著作権が切れていないという事情もあり、直接フランス国立図書館（パリ）に所蔵されているマイクロフィルムを見る以外にはアクセスする方法がない。ということで、今回の申請期間内で、数回に分けて、現地調査に出向いた。

（２）メルロ＝ポンティにおいて、彼の芸術論と存在論との関わりについて考察しようとする場合、メルロ＝ポンティのテクストの考察は当然ながら、考察対象となっている芸術作品のみならず、芸術家たちにおける芸術家としての思考との比較対照が重要となる。

メルロ＝ポンティ自身が常に参照しているセザンヌについては、既に研究代表者は考察を行っているので、今回は、メルロ＝ポンティが明示的に言及しているパウル・クレーの著述との比較対照を行った。セザンヌの絵画理論については、彼が特に弟子を持ったこともなく学校で教えたこともないため、手紙などから断片的に知ることしかできないのだが、クレーは、バウハウスなどでの教授経験があるため、彼の指導理念から、彼の絵画理論のみならず、芸術家としての位置付けも知ることができる。そのため、クレーの著述自体の研究も必要となった。

さらに、メルロ＝ポンティ存在論の特質を明らかにするためには、他の哲学者たちの存在論との比較も重要となる。この点では、前回とまたがることになるが、ミシェル・アンリのカンディンスキー論『見えないものを見る』との比較検討をさらに進めることで、メルロ＝ポンティの思惟の特徴が明らかになるだろうと思われる。

４．研究成果

まず、前回報告においてすでに示した論文「直接性の隔たり－絵画と音楽を手がかりとして」（「ミシェル・アンリ研究」）において明らかになったことは、アンリの直接性の立場に対して、メルロ＝ポンティは間接性の立場を取ること、およびそれが「反省」の機制として現れてくる、ということであった。

これに加えて、特に「隔たり」を軸として、両者とも、なぜ音楽についてではなく絵画について語るのかについて考察した。この問題は、このあと、クレーについて考察を進めるに当たって再度浮上してくる問題系であり、

その点で重要であるので、ここに再度記させて戴いた。

さて、アンリにおいては、カンディンスキーが主として参照されていたのであるが、メルロ＝ポンティが、特に『眼と精神』において重視している芸術家は、カンディンスキーの盟友でもあったクレーである（アンリとメルロ＝ポンティにおけるこの対照も興味深いところであるが、こちらに考察を向けることは、今回は行っていない）。

クレーについてメルロ＝ポンティは、クレーとも交友のあったグローマンによる『パウル・クレー』の仏訳版、クロソフスキーによる日記の仏訳、ラザロによる「クレー」論などを参照している。特にグローマンの著書中には、クレーの芸術を考えるに当たってきわめて重要な「イエナ講義」や「信条告白」の仏訳も含まれており、メルロ＝ポンティの遺稿を調べた限りでは、クレーのドイツ語原文の著作そのものにあたった形跡は見出せなかった。しかしながら、存在論の構想について論及する中でクレーの名が挙げられており、クレーが存在論を考えるに当たって大きさな意味を持っていることが確認できた。

そこで、クレーの重要なテクストである『無限の造形』および『造形思考』との比較対照を行い、メルロ＝ポンティが恐らくは手にしてはいないテクスト、またおそらく読んではいながら引用・言及していないところなども押さえつつ、メルロ＝ポンティがクレーをどのように読んだかを確認した。また、クレーの思考の枠組みの中で、メルロ＝ポンティがクローズアップしてきた箇所が、どのような意味を持ちうるところであるのかについても考察した。そのために、ベルンのパウル・クレー・センターにおいて、「絵画創造についての教育ノート」なども確認した。このことによって、クレーについては、色彩理論に於けるゲーテの影響、空間構成に於ける幾何学との関係などについて、かなり徹底した考察を行っていたことが確認できた。

こうした点から、メルロ＝ポンティ『眼と精神』や晩年の「講義ノート」における知覚と絵画との関係性について考えるための土台を固めることができたと思われる。

その結果、概ね次のような結論をうることができた。ここでは、後掲の論文②「中間領域の創造性について」に基づいて略記しておく。

(1)メルロ＝ポンティとクレーとの一つの大きな接点になるものとして「中間領域」という考え方を明らかにした。以下、①クレー、②セザンヌとクレーの接点、③メルロ＝ポンティ、④超反省、の順にまとめておく。

①クレー：中間領域について、クレーは「イエナ講演」の中で，「水や空気〔あるいは雰囲気〕のような」もので，「泳いでいたり浮遊しているときのように」，「地上的な姿勢と対比」的なものだと言う。これが意味するところは、クレーがしばしば言及する「彼岸」性と結びついている。というのは、まず、これが「可能性」の領域であって、今ある形態が此岸（つまり、この現実の世界）で唯一可能な形態ではない、ということを認めることである。これはすなわち、現実を考えるに当たって、つねに、これとは別のものを考えるということでもある。そのように考えることを可能にしてくれる領域として、この「中間領域」は考えられている。その意味で、芸術家にとっての「創造の根源」だ、と言われることにもなる。そして、その場として、「自然」が考えられているのである。

さて、これを踏まえて、クレーの有名な言葉、またメルロ＝ポンティもここから大きな示唆を得ていると考えられる言葉、「芸術の本質は、見えるものの再現ではなく、見えるようにすることにある」（信条告白）の意味が明らかになる。もし芸術が再現、言いかえると現実のもののコピーであれば、それは真の意味での創造と呼ぶことはできず、それは単に現実を二重にしたに過ぎない。芸術が現実を豊かにするということが言いうるならば、そこには現実における新しいものが現れることによってこそ可能になるのであり、そしてその可能性を現実化する役割を負わされているのが、「中間領域」に住む芸術家だということになる。

その意味で言えば、「見えるようにする」ことはヴェールがかかっているので見えない、それを取り払えば見えるようになる、という体のあり方を示しているのではない。ここで言われていることは、（理想的には）そもそも何もないところからつくり出すということであり、その意味で、そもそも「見えるようにする」側と「見えるようになる」側という対立や相関関係もないところに芸術家は立っている。芸術家は何が見えるようになるのかは自分でもよくはわからないまま制作を行うのである。クレーの言葉において、「見えるようにすること」と言われながら、「何が」見えるようになるのかについては言われていない（目的語を欠いた文章になっている）理由がここにある。それをあらかじめ名指すことはできないのである。

②セザンヌとクレーの接点：メルロ＝ポンティは、初期、中期においては、主としてセザンヌに依拠して自身の芸術論を展開することが多かったのだが、『眼と精神』においては、クレーが大きな役割を果たすようになってきている。それでは、このセザンヌとクレーとの接点がどこにあり、いかなる意味で、この接続がはたされたのだろうか。これを確認しておかねばならない。

この点について手掛かりとなるのは、やはり『眼と精神』の議論である。『眼と精神』では、エピグラフに、次のセザンヌの言葉「私があなたに翻訳してみせようとしているものは，もっと神秘的であり，存在の根そのもの，感覚の感知しがたい源泉と絡みあっているのです」が掲げられている。ところで、ク

レーがセザンヌを尊敬していて「私の師」とも呼んでいたことは日記などの記述からも明らかにわかる。そしてそのクレーは、芸術家を樹木の幹にたとえ、その仕事を深いところから昇ってくるものを集約しつつ先に送っていく仲介者だ、という。セザンヌの上の言葉に対して、それをいかに作品とするか、というところに重点を置いた言葉としてみれば、セザンヌの文言と一体になった言葉のようにも思われる。このような点で、セザンヌとクレーとは、少なくともメルロ＝ポンティから見る限り、明らかに同一の問題を共有しているということができるのである。

③メルロ＝ポンティ：メルロ＝ポンティがクレーについて積極的に言及するようになるのは、1958 年以降であり、これはちょうど彼が「自然」についての考察を行いつつ、後期の存在論の構想を抱きはじめる時期に重なっている。発表されているものの中では、クレーの名は何度も現れるわけではない。しかし、草稿のマイクロフィルムを調査したところでは、確認できた限りでではあるが、特に存在論を考えるに当たって重要な遺稿の一つである「存在と世界」と題されているテクストの中の何ヶ所かでクレーの名前が挙げられている。こうしたことから、クレーの思考が彼の存在論の構想と並行する形で重要な参照項となっていったと推定することにも妥当性があると言えるだろう。

さて、メルロ＝ポンティの『眼と精神』における重要な問題設定の一つが、「見えること〔可視性〕の謎」である。「見える」とは、一方では「見る」ことができるという能動的な側面と、「見られる」という受動的な側面との、両義性をそのまま表現しようとしたものであるが、これがクレーの中間領域において考えられるときには、むしろこの見るものと見られるものとの間に「癒着」の関係が見られることになり、それが「ナルシシズム」として語り出されることになる。この場では、今示したような能動性と受動性というあり方自体が、つまりその両者の境界線自体がニュートラルになる。メルロ＝ポンティはこの場面で、「肉」という晩年の存在論のキーワードを呈示することになる。クレーにおいて、芸術が「見えるようにする」ことと定義されていたその働きを、メルロ＝ポンティは、この「肉」が担わせることになる。

この「肉」の基本的な特性としては、まず物質ではないこと、とはいえ精神でもないことが挙げられる。では何かと言えば、メルロ＝ポンティはここに古代ギリシャにおいて考えられていた「エレメント」によって示そうとするのだが、この概念がそのどのような性質に基づいて招喚されたのかと言えば、それが物質的な意味での個物と観念との＜中程＞にある、と見られたことに基づいているのである。この点で、クレーの「中間領域」とメルロ＝ポンティの「肉」、この両者共に、中間にあるという基本的な性格の共通性を見いだすことができる。

また、クレーはこの領域を「此岸」と呼び、しばしば、すでにこの世にいない者とまだこの世にいない者の間に私は居る、という言い方でその場所を示していた。一方、メルロ＝ポンティはこの「肉」が、いまだ伝統的な哲学においてこれを示すための名前がないと言い、この点でも、これまでの絵画の有り様・哲学の有り様のうちには場を持っていなかったこの場所を示そうとしていることがわかる。

このことによって、この中間領域が芸術および哲学にとっての根源のあり方を示していることが了解されるだろう。

④超反省：メルロ＝ポンティはこの「肉」の「透明性」を強調する。これは、メルロ＝ポンティによる表面的な言及はないが、アリストテレスが『デ・アニマ』で行っている「色」に関する議論の中で、色を「透明なもの」であり、「自体的に見られるものではない」とする考察があり、これと響き合うところがあることが、すでにアロアと岡田温司の議論によって確認されている。このことが、クレーの中間領域の此岸性との近さをいよいよ際立たせている。クレーの中間領域も、メルロ＝ポンティの肉も、創造の結果からしか、その有り様を探ることはできない領域だからである。

このことから、とりわけ哲学においてはなぜ反省が重要な意味を持つのかが明らかになる。「中間領域」にせよ「肉」にせよ、それが名指されない所以たる透明性、すなわち「見えない」というあり方は、哲学においては「思惟されざるもの」であるからである。メルロ＝ポンティがあるノートの中で言うように、存在とは、それを経験するためには創造が必要なのだ。しかし、その創造を捉えようとすること自体が一つの変容をもたらさざるを得ないという意味で、この反省は、それ自体も一つの創造的な営為となる。その点で「超反省」という形を取らざるを得ないことになる。中間領域を明らかにすることは、芸術であれば「見えるようにすること」であり、哲学であれば「純粋な経験を表現にもたらすこと」（フッサール）であるが、哲学のこの営み、すなわちこのような超反省が、創造的営みとならざるをえない。その点で、芸術と哲学は等根源的であると言うことができる。

以上の考察によって、当初の目的として設定していた３点について、とりあえずは結論を得たものと考えることができる。

と同時に、今回の考察からは、先のアンリとの比較研究において問題提起はしつつも、主たるテーマとしては考察して来なかった問題として「音楽」が、クレーとライナー・マリア・リルケの関係について考察する過程から浮かび上がってきた。

当初の研究計画においては、この問題につ

いての考察は予定されておらず、マティスにおける色彩の問題、およびハイデガーの哲学における芸術の問題との比較検討を行う予定であった。しかし、この問題の重要性が浮上してきたことと、その概略なりとも押さえておきたいという考えから、当初の予定を若干変更して、こちらについての考察を先行させることにした。

(2)さて、前回の課題の最後に、アンリとメルロ＝ポンティの比較する過程で、なぜ両者とも音楽を問題にしないのか？という問いが浮上していた。この問いは、根本的な場面としては、ハイデガー、またそれを受けてマリオンが言うところの「現れざるものの現象学」と関連する領域を開くことになる。この「現れざるもの」が、クレーとメルロ＝ポンティにおける「中間領域」という場所、つまり、メルロ＝ポンティにおける「見えないもの」と問題性格を共有していることは明らかである。その意味で、「音楽」の問題は、研究代表者が根本的に問題にしている「創造性」の問題と深く関わっていることが、今回の成果としてわかってきた、ということになる。

しかし、「音楽」に固有の問題自体について論じることは、まだ着手した段階に過ぎない。斯様な次第で、今回は、これについて、まだ研究ノートという概観レベルではあれ、示しておこうと考えた。これが①の論文（研究ノート）にあたる。以下では、これについて簡単にまとめておく。

①問題の所在：現象学において、「現れないもの」という問題はいわば形容矛盾のようなものであるが、問題はその「現れない」仕方にある。その観点からこれを押さえようとするとき、音という有り様はかなり重要な問題を示唆することになる。それは、たとえば音（楽）と存在との関係、という問題を提起する。

メルロ＝ポンティは、『眼と精神』においてよく知られた表現だが、音楽について、世界の手前に、名指すことのできるもののあまりに手前にいること、そのため、「＜存在＞の純化された原寸図」以外のものは描き出せない、と言う。そのため絵画に向かったわけだが、これを逆に考えれば、音楽は絵画や言葉よりも存在に近いところにいることになる。にもかかわらず、音楽についてアンリもメルロ＝ポンティも哲学として扱えない、とするならば、そこにはある種現象学的な方法の限界を見て取ることができる、ということにもなるだろう。しかし、この限界の境界線自体は、おそらくはメルロ＝ポンティが言う「考えられないもの」である。これをいかにして主題化するか。

ここで手がかりとなると考えられるのは、音とことばの関係、とりわけ「詩」と音の関係である。

②音とことば：音は常に意味を持つ。何らか聞き慣れない音が響き渡った場合、それは「分からない音」としてまずは意味づけられ、その後解明されてから、「オオカミの遠吠えだ」などと意味が充実させられることになる。この限りで、ソシュールが述べたような、「物質的な音」に対置しうるものは、「音－観念」ないし「思考-音」だ、ということも理解しうる。これは、われわれが世界において常に思考するものとして、別言すれば、何らかのイデア的な存在者として存在していることを意味している。

③詩の韻律：ここで詩について考えてみると、とりわけマラルメなどのような象徴主義的な詩法においては、音そのものの素材性が前面に出されて強調されることになる。そのとき、言葉の音の響き合いの中から逆に世界における照応関係（コレスポンダンス）を見てとるところにボードレールの詩法も成立することになるだろう。

このような詩の音響的な響き合いを「ことばの音楽」と呼ぶことができる。これについては、特に、マラルメやヴァレリーの詩法が問題になる。ここを手がかりとして、音楽と存在との関係について考察を進めることが可能なのではないかというのが、研究代表者の基本的な発想である。

④この点の議論を、さらに補強するために、モーリス・ラヴェルとクロード・ドビュッシーが、たまたまマラルメの同じ２篇の詩に作曲した例を検証した。この検討から直接とは言えないにせよ浮きあがらせることができた事柄は、音楽は沈黙を表現する、少なくとも、言葉としては現れえないものを表現する、ということである。この点について深く考察しているのは、ウラジミール・ジャンケレヴィッチである。

メルロ＝ポンティにおいては言葉が存在に根ざしていると考えられている限り、この音楽と言葉の関係が存在を考えるにあたっていかなる意味を持ちうるかを考察する必要が生じてくる。その際、ジャンケレヴィッチの音楽哲学は、直接的ではないにせよ、何らかの示唆を与えるものとして現れてきている。今後、この問題系について、さらに考察を進めることにしたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①本郷均、ことばと音楽／存在、東京電機大学、査読無（研究ノート）、2014、pp.213-217.
DOI なし。
②本郷均、中間領域の創造性について　クレーとメルロ＝ポンティ、日本大学経済学部、研究紀要、査読無（依頼論文）、2014、pp.45-74.
DOI なし、
URL:

http://www.eco.nihon-u.ac.jp/about/maga
zine/kiyo/pdf/75/75-p45-74.pdf

〔学会発表〕（計０件）
〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://homepage3.nifty.com/mpc/page001.
htm

６．研究組織
(1)研究代表者
本郷　均（HONGO HITOSHI）
　東京電機大学・工学部・教授
　研究者番号：00229246

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：